

お茶の水女子大学卒業生のライフコース 報告書 概要

調査目的

本調査は、本学学部卒業生・大学院修了生のライフコースを明らかにすることを目的としており、本学在学中の生活の他、学部卒業・大学院修了後の職業生活や家庭生活、社会的活動、さらには本学の今後の活動に対する期待について調査した。

調査対象者

	総数	備考
卒業生数 (a)	33,513	学部卒業生*26,861 名、大学院修了生 6,652 名
調査票配布数 (b)	20,280	桜蔭会（大学同窓会）名簿に登録されている、学部卒業生 20,043 名、大学院修了生 237 名
有効回収数 (c)	9,141	
配布率 (b/a*100)	60.51	
有効回収率 (c/b*100)	45.07	

*本学学部を卒業後、大学院へ進学した者も含む

調査結果の概要

【第一部 卒業生のライフコース】

東京女子高等師範学校卒業生に絞った分析の他、「就業とキャリア」「家庭と仕事」「生き方と価値観」「社会的活動」について分析を行った。

本学学部卒業生・大学院修了生は就業率が高く、役職者比率が高いといった特徴の他、女性の性役割意識が戦前と戦後で、キャリア意識が雇用機会均等法施行以前と以後で変化していることが明らかとなった。最近の傾向として浮かび上がった点は、育児期間が拡散し、子育てに夫が関与するケースが増え、社会的制度利用も増加していること、子育て終了や定年を機に社会的活動を始める人が多いこと、などである。

【第二部 本学とのかかわりとライフコース】

第二部はアンケートの全質問項目に分析を加えたものである。本学学部卒業生・大学院修了生のライフコースの全体像とともに在学中の生活、本学に対して希望する将来像が示されている。

<学部卒業生・大学院修了生の基本属性>

出身高校の多くは都道府県立であるが、近年は私立出身者の割合が徐々に増加し、国立や都道府県市立出身者は減少する傾向を示した。4分の3が共学の高校出身であり、出身高校の所在地は東京が約3割、東京以外の関東が1/4、関東出身者は半数強であった。これに対して調査時点（2008年4月2日現在）の居住地は、東京が4割弱、東京以外の関東3割強であり、7割の学部卒業生・大学院修了生が関東に居住している。大学院進学者（博士前期課程・後期課程）は年々増える傾向にあり、特に近年、博士後期課程進学者が増加している。

<在学中の生活と満足度>

学部在学中に最も力を入れた活動は「友人とのつきあい」であり、次いで「大学の授業や研究」「関心領域についての自主的学習・読書」であった。学部卒業後の職業生活に最も役に立ったと回答されたのは「大学の授業や研究」であり、特に理学部卒業生の支持が顕著である。力を入れた活動ほど、その後の生活に役立っていると考えられる学部卒業生が多い。大学院修了生については、大半が在学中に「自分の研究テーマに基づく研究・調査」「大学院での授業」「修士論文や博士論文の執筆」に力を入れ、その後のあらゆる生活に対して「自分の研究テーマに基づく研究・調査」が役立つと認識されている。

学部卒業生・大学院修了生の多くは、在学生活のうち「在学中の友人との交流」「専門・専攻科目」「大学全体の雰囲気」に満足していた。「教育全般」は6割強の学部卒業生・大学院修了生が満足しており、「卒業論文・卒業研究」「本学の教員との交流」「指導教員の指導方法・指導内容」も6割前後の学部卒業生・大学院修了生が満足していることが確認された。

<学部卒業・大学院修了後の職業>

学部卒業生の初職で最も多いのが「専門技術職」、次いで「事務的職業」である。特に1970年代までの卒業生は、8割近くが高校・中学教員に代表される「専門技術職」に就いていた。その後は、「専門技術職」の中では教員が相対的に減りSEや技術職が増えていく。また大学院進学が全般に増え、理系では近年大幅に伸びている。2000年代の新卒採用の縮小の影響は本学にも見られ、初職就職のうち正規雇用者の割合は9割強から9割弱に落ちている。

大学院修了者の初職は1970年以前には教育・研究職が大半だったが、以降は教育以外の専門・技術的職業が増加した。仕事を見つけた経緯も、教師の紹介から公募へと近年大きく変化している。

5年未満に初職をやめた卒業生の割合のピークは、卒業年1960～80年代のコHORTである。この世代は初職の離職理由が「結婚のため」と回答した割合のピークの世代でもある。初職をやめた被雇用者の卒業生の6割～7割が「結婚のため」「出産、育児のため」を理由としてあげ、本学卒業生でも家族イベントが職業中断に及ぼす影響が小さくないことが確認された。しかし、本学卒業生の育児期の正規雇用率は全国大卒女性平均より10%ポイント以上高く、仕事と子育てを両立する卒業生の割合が高いことも特徴の一つである。

<ライフコースと家族形成>

ライフイベント発生年齢の平均値を算出したところ、正規雇用の割合は24歳頃ピークを迎え、子育てを経験する割合は33歳頃にピークを迎えていた。子ども数をみると、卒業年90年代コHORTでは0人の割合が大きく増加、晩産化、少産化が本学卒業生の間にも確実に起こっている。

学部卒業時に理想としていたライフコースで、両立コース（継続就業）希望者が半数を超えるのは卒業年90年代コHORT以降の若い世代である。実際にたどってきたライフコースは、晩婚化を反映して若い卒業生ほど独身コースが多く、自分がたどりそうなライフコースは、若い世代では両立コースが多かった。

全国調査の結果と比較してみると、本学卒業生は旧来の性別役割分業を否定する傾向が大変強い。この傾向は学部卒業生よりも修士修了生、さらに博士修了生ほど顕著である。ただし「男は仕事、女は家庭」に対する否定意見が多いのに対し、「少なくとも子どもが小さいうちは、母親は仕事を持たずに家にいるのが望ましい」に対しては肯定する卒業生が多く、特に2001年以降卒業の若い世代では肯定が6割に上った。

自由意見では、子育てというかけがえのない経験、子育てに時間を割くことの重要性を、後輩に伝えようとする意見が目立った。子育てを大切にしながら、無理なく働き続けられる社会が切望されている。

<大学の将来像として望む姿>

学部卒業生・大学院修了生が大学に提供を望んでいる場や機会は、「知識・技能を高め転職・昇進につながるもの」「卒業生の人材登録サービスや就職支援」など職業に直結するものや、「お茶の水女子大学で開講する授業への参加」など学びに関するものであった。

共学か、別学維持かの希望を尋ねたところ、「将来にわたって別学を維持した方がよい」「当分の間は、別学を維持した方がよい」と考える割合は、学部に対して約8割、大学院に対して約6割と多くを占める。最近の卒業年代からは別学維持が支持され、50歳代以上の卒業生に共学化を望む意見がみられた。

大学の今後の姿としては、「女性の多様なライフコースに柔軟に対応する」とともに学部と院、あるいは他大学との交流を図ることが重視された。将来像として重点化を望む点は、「男女共同参画社会をリードする人材を養成する」への賛意がもっとも高かった。

学部卒業生・大学院修了生の母校に対して書かれた意見はいずれも真摯であり、お茶の水女子大学が伝統ある女子大として、特色を積極的に活かしてゆくことが期待されている。